

巻頭言

明1992年から実施される小学校学習指導要領では、見通しのある活動ということで、概数・概算と概測が重視されている。これは、マイクロエレクトロニクス技術の発達によって、電卓、パソコンが簡単に手に入ることを反映したものであろう。

概数・概算・概測については、その重要性がずっと以前からいわれてきた。しかし、子ども達には抵抗ある教材で、教師にとっては大層指導しにくい分野であった。ところが、社会の技術の進歩から、この概数・概測は、従来とは違った必要感が私たちに生じてきた。

従前のように、簡単に計算ができる機器がない時代では、計算は人間の手に寄らざるを得なかった。このため、人間が正確に計算を行う技能を身につけることは社会生活を送る上で絶対に必要な基礎学力であった。しかし、今日では、計算は手で行うことはまずない。計算機器がなかったら、機器を手元に用意するために時間をかけるであろう。機器によって、行った計算値は正しいのかどうかを瞬時に判定する能力とか、計算値の意味を正しく判断できる能力がこれからの基礎となる学力、と私は考えている。

このような時代では、計算指導の意味合いが変わらざるをえない。だからといって、計算技能を身につける教育がいらぬ、というのではない。今日でも、計算技能を身につけることはやはり重要である。しかし、その教育的意味は従来のものとは大きく変えなければならない。また、このことによって、その指導内容・方法も大きく変える必要がある。

指導要領でも数の十進数位取り記数法で乗法的性質を重視するなど、従来とは違った、数概念を導入しようとしている。だが、一方では、従来のままの計算指導が残っており、新しい考えで筋を通すようになっていない。

数計算指導は、新しい時代にどう対応するよう改革すべきかを研究するのは大変大事なことである、と私は考えている。

森川幾太郎 (山形大学)